

○大引の仕口は一般的に落とし蟻にして取付ける。また大引の下端には床束の胴着に当る所に、束均をして枿穴を剛しておく。

木材明細書には必要長さ(真々の長さか、+100mm(3寸)位長めとする。)を記入すること。(大引は割合に定尺長さよりやや短かいのが多い)。

### ● 床 束 (ゆかつか)

大引及び土台(足固め)を支えるため、一般的に床下土間に5間間隔に据えてある。東石・東石コンクリートブロック(束止用プレート付)等に建てる。上級では東頭に作った平枿を大引下端の枿穴に差し込栓止にする。一般的には東石上に単に床束を建て大引(土台)に銼止め(両面打)や大釘打で緊結する。

★根定規(ねじよき)～東石天端から大引(土台)下端の胴着きまでを根定規という。床束の必要長さは、根定規+大引成位とする。1本拾いでは必ず1本の必要長さで数量を記入する事。

### ● 根 搦 貫 (ねがらみぬき)

床束の振れ止めとして根搦貫を使用する。根搦貫を通して楔で締付けるか、又は、東面に大釘打ちにして束の倒れぬようにする。根搦貫は床束外面より必ず余長を考慮する事。余長は床束外面より根搦貫の3倍以上かつ300mm(1尺)以上とする。

★1本拾いの場合の目安として床束(間隔が5間以内)、1本当り2～2.5m換算し、1本の長さ(定尺)は伏図を検討し拾い出しする。

### ● 床 束 柱 ・ 独 鈷 貫 (どっこぬき)

床束柱は、特に床高が高い建物(社寺建築物に多い・回廊や露台・舞台等)の場合の床束の大きさも一般床束よりも大きく長い部材で、建物構造上の問題からでも、床束柱と呼べるものである。床束柱(床柱)の下部端に土台(足固め)や地貫などが取付けられていない。

床束柱間を縦横に数段にわたって(軸組横架材)つなぎ材として取付けられている部材を独鈷貫と称し、構造材(軸組の部材)で重要な部位である。仕口に付いて、柱間を通して楔打ちとして締付け固定する。

独鈷貫寸法に付いて、幅は束柱幅の $\frac{1}{3} \sim \frac{1}{4}$ 以上とし、成は束柱の幅と同寸法以上位とする。

### ● 根 太 掛 け (ねだかけ)

床伏図(根太伏図)では、往々にして根太掛けが図示されていないことが多い。特に和室の敷居を取付は場合、敷居と土台(足固め)を固定する引き独鈷を取付ける場合根太が土台上端までのびていると支障をおこす場合がある。

根太掛は根太を受ける部材で、(根太方向と直角方向で各部居・軸組部や間仕切どとに取付ける)ある。

根太掛上端は、(大引の同様)荒鉋削りして陸(ろく)を直して使用すること。取付ける場合、土台の上端に15mm(5分)位は乗る様にし高さによって根太掛けを欠き込みとし。